

浅田 隆著

## 『葉山嘉樹論―海に生くる人々』をめぐって―』

浦西 和彦

浅田隆の『葉山嘉樹論』（昭和53年6月10日発行、桜楓社）が上梓されたことを喜びたい。本書は、葉山嘉樹を対象とした最初の本格的な研究論文集である。日本プロレタリア文学史における葉山嘉樹の仕事は極めて大きい。その大きな仕事の割りには、これまで葉山嘉樹を直接対象とした研究論文集が刊行されなかった。それは、葉山嘉樹が前田河広一郎らとともに文戦派の作家の一員であったために研究が遅れたのであろう。葉山嘉樹没後三十年にしてようやく全六巻の個人全集が筑摩書房から出された。そして、ここに浅田隆によって最初の研究論文集が出版されたことは、葉山嘉樹に関心をもつものの一人として非常に嬉しく思う。

本書は、葉山嘉樹の郷里である豊津、それは徳川幕府の親藩であった小笠原藩が慶応二年の第二次征長の役で敗れ、小倉から移住し、小笠原藩終熄の地となったところであり、そうした豊津のもつ歴史的風土と葉山嘉樹とのかわりに焦点をおいた論考「葉山嘉樹論の前提」と、主に名古屋の労働組合運動をしていた時期を考察した「思想形成過程」と、そして『海に生くる人々』論の

三部から成っている。本書の副題には「―海に生くる人々』をめぐって―」とあるが、「葉山嘉樹論の前提」「思想形成過程」が全体の割り合いでいえば三分の二頁を占めている。そこに本書の特徴の一つがあるといっている。葉山嘉樹の作品はどちらかというと大変わかりやすい。ただ黙って読めば、それでそのおもしろさが十分に理解できる。しかし、葉山嘉樹の経歴は、波瀾万丈であって、葉山嘉樹自身が自作「年譜」で「それからの生活は、余りに眼まぐるしくて、年代も生活も、順序立って覚えてあない」と書いているように、なかなか一筋縄では理解ができないという面がある。葉山嘉樹の「海に生くる人々」を論じる前に、「葉山嘉樹の前提」や「思想形成過程」が書かれなければならなかったのもそのためであろう。

第一部「葉山嘉樹論の前提」は、次の四章に分かれている。

## 第一章 豊津受容の様相

## 第二章 小笠原藩の流転と新時代への対応

## 第三章 嘉樹の内なる豊津像とその実像

## 第四章 父荒太郎の精神構造

このうち第一章の部分だけが「奈良大学紀要」第四号（昭和50年12月発行）に発表されたが、そのほかの第二章から第四章までは書き下しである。

第一章「豊津受容の様相」では、葉山嘉樹の豊津中学の先輩である界利彦の豊津に対する思慕の情が「母なる故郷の感」があるのに比較して、葉山嘉樹の「豊津受容にはかなりの異常性」が感

じられ、「一貫して豊津を厭悪する傾向」、「自己の豊津時代に対する執拗な拒否の姿勢」が見受けられるという。プロレタリア文学運動が解体した後、葉山嘉樹は生活の困窮のため長野や岐阜を転々としたが、故郷の豊津へ身を寄せるといふようなことはしなかった。そのことを考えると、葉山嘉樹が「豊津を厭悪」していたという指摘は大変おもしろく興味深い。たしかに堺利彦と比べてそれはそうであったであろう。しかし、葉山嘉樹と同時代のほかのプロレタリア作家たちとの比較においても、故郷に対する「受容の様相」が、葉山嘉樹の場合には特別「異常性」が感じられるのであったか。葉山嘉樹という一個の資質の問題か、あるいはその当時のプロレタリア作家一般の故郷に対する一種のポーズであったのか。小林多喜二も前田河広一郎も里村欣三も、「甘美な精神の帰属地としての故郷」を描かなかった。堺利彦の「望郷台」〔読売新聞〕明治29年3月30日〜4月4日〕等に見られるような郷里に対する「思慕の情が沸々とたぎつて」いる文章を書かなかった。

葉山嘉樹は堺利彦のように豊津を「甘美な郷愁の対象」として描かなかったというよりも、全くといっていいぐらい豊津について書いていない。たしかに、そのこと自体が「嘉樹論の一つの問題点となる」であろう。葉山嘉樹は若くして外国航路の海上労働者としての生活体験をした。それだけに、狭い郷土意識にとらわれることなく、堺利彦よりもインターナショナルな面をもっていたといえよう。葉山嘉樹が豊津のことを書かなかったからといって、「豊津を厭悪」していたことには無論ならない。本書の「豊津受

容の様相」で具体的に問題にされている葉山嘉樹の文章は、短篇「死屍を食ふ男」とエッセイ「龍ヶ鼻」と「原」―我が郷土を語る―の二つである。

「死屍を食ふ男」は、『新青年』昭和二年四月号に登載された作品で、寄宿舎の同室生が隣接の墓地の新仏の棺をあびぎ、その死肉を食べる姿を目撃するという、葉山嘉樹にはめずらしい怪談小説である。ここに出てくる中学校は、たしかに葉山嘉樹が自分の郷里の豊津中学校を想定して書いているであろう。しかし、この「死屍を食ふ男」は、葉山嘉樹の中学生時代を忠実に描くことを意図した作品でもない。寄宿舎の同室生が墓地の死肉を食うという怪談ものとしての効果や雰囲気をも小説世界でつくり出すことを目的としているのであって、中学校の描きかたもその面から書かれている。「死屍を食ふ男」は、堺利彦の「望郷台」や「堺利彦伝」〔改造〕大正13年12月号〜14年9月号〕とは、根本的に異質の作品であって、それらと比較することも、また、この作品から直接に、葉山嘉樹にとって豊津は「一種の突き放した雰囲気を感じられる」と読み取ることには無理があるのではないかと思われる。「龍ヶ鼻」と「原」―我が郷土を語る―は、親しかった豊津の自然について語っている。浅田隆は、この葉山嘉樹の文章を分析して、「自己を培った時間やその中に展開されたであろう具体的な人間関係については全く触れることをせず、自己内部の豊津時代の記憶の世界にわけ入ることを出来るだけ拒否しているのである」というのである。葉山嘉樹のこの文章は、「いづれにせよ、

私はそこで、一番私に親しかったものは、それ等の自然であった。人間の噂は、あまり私に興味を起させなかった」と結ばれており、「人間関係について全く触れ」ていないのは事実である。しかし、この『龍ヶ鼻』と『原』―我が郷土を語る―」が発表されたのは『新文芸日記―昭和六年版―』（昭和5年11月17日発行、新潮社）であって、それも原稿用紙二枚以内で書かねばならぬ制約のもとにあつては、「具体的な人間関係」に言及しなかったとしても仕方のないことであろう。郷土における「具体的な人間関係」ということであれば、むしろ「九州の友へ」（福岡日日新聞）昭和2年1月17日、2月21日発行）を問題にすべきであつたと思う。『龍ヶ鼻』と『原』―我が郷土を語る―」に、「具体的な人間関係」について書いていないからといって、葉山嘉樹が郷土を「厭悪」し、「拒否」していることにはならないであろう。

第二章「小笠原藩の流転と新時代への対応」では、『小倉市誌』などを駆使し、複雑な小笠原藩における幕末維新期の歴史とそこに醸成された精神風土を、「旧藩の体質から発する強い国家志向型の価値観―同族意識集団的結束による国家権力への追従―」と捕らえられ、第三章「嘉樹の内なる豊津像とその実像」では、葉山嘉樹が豊津に対して「厭悪の念」を持っていた源を、そうした「豊津の精神風土に対する強い拒否の姿勢によるもの」であつたという。

第四章「父荒太郎の精神構造」では、自伝性の強い作品「誰が殺したか？」などから、父荒太郎像を「感情を抑制することを善

とする禁欲的な倫現観によつて家族の前に立つ、家父長的父親像」と指摘されている。父荒太郎は十四年間も郡長を務めていたのもかわらず、その経歴には空白部分がかなりある。郡長時代の業績さえ皆目判明しない。父荒太郎の精神構造を解明するには、現在ほとんど直接的な資料が皆無に近い状態である。そうした条件を克服しながらでの浅田隆の論考は意義深い。父荒太郎が明治二十八年七月十四日に日清戦争凱旋の郷土出身の軍人達を迎えた祝辞は、郡長としての公の席でのもので、型通り紋切形であるだけに、荒太郎に旧秩序全体の崩壊による価値観の挫折がおとずれなかつたか、どうかの結論はおいそれと出すことができない。ただ、葉山嘉樹が嘉和、民雄の二兄にむかつて『牢に入つてもやる決心ならいいが、牢に入つたら何にも出来ないだらう』これは、一度終身懲役の刑を宣告され五年間の禁錮生活を体験して来た祖父（荒太郎）の悲痛な言葉だ」と獄中記で書き記していることである。荒太郎の入獄が旧秩序の崩壊とどう関係していたのか、今後の郷土史家による一等資料の発掘を待ちたい。

第二部の「思想形成過程」の章立は、次の通りである。

第一章 下降志向の萌芽

第二章 『極楽世界』とその発行母体

第三章 「極楽会」結成の動機

第四章 「極楽会」と背景の時代思潮

第五章 精神主義の止揚

まとめ

第一部では、論の前提となるところの葉山嘉樹が郷土である豊津に対して「厭悪の念」を持っていたということがもう一つ説得力に欠けていたが、第二部では、全体に第一部に比べて論理の展開にも無理がなく、本書のなかでも優れたものとなっている。特に赤尾織之助・敏らの『極楽世界』と葉山嘉樹とのかかわりは、浅田隆によつてはじめて明らかにされたものであり、その多面的で綿密な調査には脱帽した。第二部の中心となっている『極楽世界』や極楽会について、浅田隆の調査研究に、いま加えるべき資料はなにも一つない。ただ、赤尾敏らと葉山嘉樹との関係を考える時、亀田了介の存在に注目してもよいのではないかと思う。亀田了介は葉山嘉樹とともに名古屋新聞の記者をやっていた。当時、名古屋労働者協会のなかでは、葉山嘉樹よりも亀田了介の方が理論家であつたといわれている。亀田了介は愛知時計争議で葉山嘉樹と一緒に名古屋新聞社を退社し、争議に参加、検挙された。出獄後、労働組合運動の上では葉山嘉樹らと分かれ、赤尾織之助の下で働くようになる。そして、自殺してしまつた。『極楽世界』の同人として赤尾織之助らと接触のあつた葉山嘉樹が、名古屋労働者協会に加入して以後、赤尾織之助らの運動とは離れていったのに対して、亀田了介はその逆であつた。葉山嘉樹の小説のなかで、赤尾のことを赤田、亀田のことを亀山として出てくるのが「歪みくねつた道」(『改造』昭和7年2月号)である。その中に、「それで、彼(赤尾敏)とは運動の方法も思想も違つてゐるけれど、知つたことは知つてゐるし、その親爺とも親しいし、古い知り

『葉山嘉樹論—「海に生きる人々」をめぐる—』

合ひの赤田の家を訪ねた」という部分がある。本書ではそのへんのところを押えておいてもよかつたのではないかという気がする。第五章の「精神主義の止揚」は、これまでの種々の研究成果の上に立って、「嘉樹にとって神戸の争議の直接的・間接的体験が思想形成上の重要な転回点であり、愛知時計争議の指導はその思想の実践的確認であつた」ことを実証的に提示した好論文である。第三部の『「海に生きる人々」論』には、次の四つの論文が収録されている。

### 第一章 嘉樹の内面的論理と作品像

### 第二章 成立事情から見た作品像

### 第三章 離村出稼ぎ農民としての小倉像

### 第四章 小倉の側面から見た作品像とその問題

四編の「海に生きる人々」論のうち、最も感心したのは、第二章の「成立事情から見た作品像」である。これまでの「海に生きる人々」論は、どちらかというところ葉山嘉樹の分身として描かれている藤原や波田に焦点をおいて展開されてきたが、浅田隆の「海に生きる人々」論の特色は、葉山嘉樹の万字丸船員時代の友人小椋甚一をモデルにして造型されている小倉に力点をおいて論述されていることである。小倉の形象は、「ネガティブな嘉樹の側面とのかかわりの中に造型のモチーフを持っている」と指摘し、「海に生きる人々」執筆当時の獄中における葉山嘉樹の内面世界を考察しながら、「この小倉の内面に映ずる故郷の村の姿には、嘉樹が『娑婆』に残して来た家族の姿が重ねられていたに違いない。

したがって、嘉樹が藤原の理論によって小倉を否定したことは、小倉の形象を通じて客体化した自己内部の迷いを否定することであり、それは社会運動のために家族的幸福を捨てるといふ自己に向けての決意表明でもあったと言えるだろう」と述べているのは鋭い論及である。しかし、小倉の離村出稼ぎ農民としての側面の追求に、作品世界を離れて、神島二郎、松永伍一、潮見俊隆らに無批判的に寄りかかっているとかが若干見られるにやや不満を覚える。

不満といえは、「海に生くる人々」以外の作品をとりあげた論

文、例えば「葉山嘉樹『窮鳥』について」『箱舟』のパロディー」(『解釈』昭和50年4月号)などをはじめ優れたものを書きながら、それらが本書に収録されなかったことである。「あとがき」で、本書は「私の嘉樹論の中間的な総括ではあるが、嘉樹の文学的世界ということでは、やとその緒についたばかりにすぎない」と述べている。「海に生くる人々」以外の葉山嘉樹の数多い作品を論じた『葉山嘉樹論』の統編を、いずれ近い将来に上梓されることを大きく期待したい。

(うらにし・かずひこ 関西大学助教授)